

〈研究ノート〉

日・中両民族の雷神思想の源流（その二）

——神話史と宗教史の黎明

李 均 洋

序言

神話とはなんなのであるか。神とはなんなのであるか。結論は千人千様といえる。研究者の研究手法や依拠する資料の相違によって多彩多様になったのである。

雷神の研究というと、多少の論文⁽¹⁾があるが、神話史と宗教史の立場からの論は今まで空白となっている。しかしながら、これからの雷神の研究はこの立場に立つべきではないかと、考える。

一、雷^二神

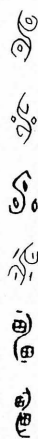
「雷神」という言葉の最初に出たものは、おおよそ戦国と前漢初との間に編成された『山海経・海内東経』中の「雷澤中に雷神有り」であろうが、「雷」という言葉は、中国の最古の文字である甲骨文字と金石銘文にみえる。これらの古文字は中国神


話文献の上限でもあるといえる。


甲骨学界の定説によると、甲骨文字は次の「五期」に区分されている。第一期は、殷（商）第十九代の盤庚から次の小辛・小乙・武丁までであり、第二期は、祖庚・祖甲の時代であり、第三期は、廩辛王・康丁の時代であり、第四期は、武乙・文丁の時代であり、第五期は、帝乙と殷（商）の最後の第三十代の帝辛（紂王）である。紀元でいえば、第一期から第五期まではおおよそ紀元前十四世紀から紀元前十一世紀までに当たっている。今まで発見された甲骨文字の数量は十五万片ぐらいいであり、内容は国家政治・社会生産と思想文化などにわたっている。

金石銘文は殷・西周・東周の時代差の別がある。殷の金石銘文は疑いなく原始漢字の一体であることが認められている。

郭沫若氏が主編した字数最大の『甲骨文字合集』の中、「雷」の字形はいくつかある。それをあげてみよう。







郭沫若・孫海波・高明諸氏の甲骨文字の碩学は「」を「一期」と認めている。⁽²⁾







金石銘文の方では、周代晩期の虡駒尊と駒尊蓋は「雷」を「」と銘記している。




甲骨文字には「神」という文字はなかったが、「申」がたくさんある。例えば、







(『甲骨文字合集』による)



その中、「」は「二期」、「」は「三期」、「」は「四期」、「」は「五期」と一般に言われる。⁽³⁾



「申」の金石銘文は、「」(商の辛椈角)・「」(周代早期の矢方夔)・「」(周代中期の不艮殷)・「」(周代晩期の克鼎)・「」(周代晩期の杜伯盃)・「」(春秋期の寧兒鼎)などがある。これらの「申」の象形文字は雷鳴時の稲光りの起こる形に象る。これは中国と日本の甲骨文字の碩学に公認されている。

後漢の許慎の『説文』は「申は神なり」と言う。金石銘文の「神」は、「」(周代中期の伯彳殷)・「」(周代晩期の克鐘)・「」(戦国期の陳賁殷)などがある。

注意すべきは甲骨文字・金石銘文の「雷」と甲骨文字の「申」・金石銘文の「神」とが類似していることである。

「」(「」)は稲光りを示し、「」の上下の「」は雷鳴が四方へ鳴り移るさまを示す。これは「雷」という文字の基本的形である。

甲骨文字は「雷」を「」とも書いているが、「」は雨を示す。

甲骨文字と金石銘文は「申」・「神」をそれぞれ「」・「」とも書いて、「雷」字体の「稲光り」部分と共通である。これは「雷」と「神」との係わりを示している。少なくとも殷(商)時代までに、「雷」崇拜の上に「神」の概念が出てきたのであると考えられる。

二、雷神の原始性

後漢の王充の『論衡・雷虚篇』に次の神話がある。「盛夏の時、雷電迅疾、樹木を撃折し、家屋を壊敗し、時に殺人を犯す。世俗以為らく、……天龍を取る……天怒り」。これに対して、王充はそう思わず、「虚妄の言」と退けている。

王充の『論衡』は古代哲学・思想の分野の卓越な著作であるが、その中の神話観については筆者は納得できない。彼の「雷虚説」の誤りは、後漢人としての合理主義者の立場から後漢に残っていた神話を考察していることにある。後漢はもとより、中国最古の夏代でも、すでに王朝文明の社会に入っていたが、

原始社会から遙かに離れている。「天龍を取る」という神話を別の課題で論考しなければいけないが、「天怒り」というと、まさに原始人の雷神神話の思想ではないか、と思う。

古代典籍に記載されていた中国と日本の神話は、衆知のように、七世紀頃の「記・紀」などが日本神話の最初の典籍であり、中国の方がこれより古いにもかかわらず、『山海経』や『春秋左氏伝』など主な神話典籍も戦国時代（紀元前四七五〜前二二二）のものにすぎない。これらの典籍に記載されていた神話は、当時の王権化と歴史化の色彩を濃厚にもっている。神話の發展史から考えてみると、これは当然のことである。

これに対して、十三世紀までに口頭伝承によって伝え、そのあと東巴象形文字⁽⁴⁾によって記載されていた、中国の少数民族である納西族の『吉本布』（祭天古歌——雷神電神祭）は、割合に神話の原始性を残している。ちょっと長いが、挙げてみよう。

あはれ——

大昔の時期

上なる天空は尚暗黒の時期

下なる大地は尚混沌の時期

太陽は尚いまだ昼を明るく照らさざりき

月は尚夜を明るく照らさざりき

われら人間は勝利の神祇に支えられ、保護されて居たりき

われらの声望と名誉は古えより人々に知られたり

あたかも夏の谷川が大河に注ぎあふれるがごとし

(中略)

われらの先祖たちの

最初に烏魯托居窪（神話伝説の地名）に來たりし時期
如何に靈鬼と神靈を祭祀すべきかをしらず
わが先祖たち

始めて那莫本肯居（神話伝説の地名）に到りしとき

未知の客人を招待するすべも知らず

その後人々は漸く知れり

——雷の神を恭しく祭祀すべきを

その後人々は漸く知れり

——電の神をまごころもて祭祀すべき手だてを

人々は上つ方の首長の示教を尋ねに行きしことあり

人々は下つ方の卜師の教えを求めに行きしことあり

卓越せる知恵を持てる人主はいちはやく知れり

すぐれて利発なる卜師はいち早く見たり

——雷神と電神を祭祀すべき兆候は

最初に卜師の手の上の肩胛骨に顯示せられたり

雷神・電神と中央の「許」神（雷神の別称）は

同時に天地の間に出現せり

われらは恭しく雷神と電神を祭祀するなり

われわれは真心もて中央の「許」神を祭祀するなり

雷神・電神と中央「許」神を祭祀するとき

われらは神祇に歳の吉祥を希求し乞い求めるなり
われらは神靈に長寿を祈る

われらの延年益寿が得らるるは

ひとえに雷神と電神の加護によるなり

中央「許」神の庇護によるなり

左手の雷神を祭祀することなくんば

蒼天は明るく晴れわたるには至らじ

大地は広く豊かになるには至らじ

左手のいかめしき雷神は

科督班（音訳）と言わるる神なり

白い尾の巨龍に乗る神なり

火炎を放つ衣服をはおる神なり

輝かしき火の靴を履ける神なり

彼は美古托（雷神の居住地）より降り来れり

堆本希（人類の居住している大地）に到りましたり

その神高山の頂に出づるとき

樹々の青枝の紛紛と落つるなり

彼の深き谷に出でたるとき

地上の土層をつぎつぎに掘り開くことをえたり

かく巨大なる威力は雷神にこそ備われり

かかる奇跡は雷神こそ可能なれ

雷神の神威は

九〇座の敵の村落を壊滅すべし
七〇座の仇敵の砦を掃討すべし

昔、われらの男児山頂へ柴を刈りに行きしとき

無知の故に誤りて雷神の樹を伐りしことなし

昔、われらの女児谷に水をくみにいきしとき

愚かさの故に誤りて雷神の水をすくいしことなし

われらは雷神の聖なる山の磐石に敢えて触れしことなし

われら一家は子々孫々栄え

われらは富裕と幸福にならむ

われらは益寿延年を得む

これらはみな雷神の庇護のおかげなり

祭祀のための四つ足の白く美しき豚の脂肉もて

祭祀のための四つ足の白く美しき豚の赤身の肉もて

われらは先ずそれをそのまま雷神にささげむ

（雷神さまを祭祀する古歌詞は以上の雷神を祭祀する部分と大体同じく、中略）

雷神と電神の出現せしとき

中央なる「許」神は同時に天地の間に出現せり

岩山に成長する檜——「許」神は

人類の最初の舅父（先祖のこと）

大地に成長する黄色なるくぬぎ(樸)と青い檜は

許饒堆(地名)の「許」神の祖母なる

天の周りばかりに囲まれるこそ

天自らが安定平和になりしなり

われら一家は子々孫々栄え

われらは富裕と幸福にならむ

われらは益寿延年を得む

これらはみな「許」神の庇護によるなり

祭祀のための四つ足の白く美しき豚の脂肉もて

祭祀のための四つ足の白く美しき豚の赤身の肉もて

われらは先ずそれをそのまま「許」神にささげむ⁽⁵⁾

(後略)

「許」神は雷神・電神とどんな係わりをもっているのか。『祭

天古歌——蒙増・查班紹』(生献犠牲篇・人類繁演篇)から、

「許」神は天神と地神の間における神である、とわかるが、実

は「許」神は雷神・電神と同じく雷神である。

雲南・貴州・湖南など地方の土家族・侗族・苗族・瑶族などはみな「天では雷神こそ最高の神であり、地では舅こそ最高の地位を持っている」という諺がある。この地帯の神話伝説によると、雷公と人類の始祖は同じ母親から生まれたのである。また、人類の始祖である伏羲と妹は雷公の助けで生き延びたのである、二人の結婚も雷公の提案であった。だから、檜——「許」神が「人類の最初の舅父である」と、納西族の「古歌」は歌っ

ている。

フレイザー氏の「金枝」||カシ(樾)||雷神の説も檜——許神を雷神と考えることに論拠を提供してくれたのである。

フレイザー氏によると、「金枝」は寄生木と生命樹として尊崇されているが、雷崇拜と関連している。ブリティッシュ・コロンビアのトムブスン・インディアン族は、敵の部落を焼き払おうとする場合、落雷に撃たれた樹でつくった矢で家を射るか、そのような木片にとりつけた矢で射るのであった。ザグセンのヴェンドの農民は、落雷に撃たれた木を炉にくべて焚こうとしない。このような薪は家を焼いてしまうという。同じように南アフリカのトンガ族は、このような燃料を焚くことを拒み、それで焚いた火にあたらうとはしない。ところがこれとは反対に、北部ローデシアのウイナムワンガ族は、落雷で樹に火が燃え移った場合には、村じゅうの火をすっかり消し去ってから炉を新しく塗りかえ、主だった人々が雷火を酋長のところへ持ってくるのであって、酋長はその火に向かって祈りをささげる。次に酋長はすべての村々にこの新火を配り、村人たちは死者に対してこの賜物の報酬を与えるのである。このことは彼らが落雷で起こされた火を尊崇することを表わしているが、彼らは落雷を神自身が地上に降りるのだと言っている、この尊崇は著しいものがある。カリフォルニアのマイドゥー・インディアン族もこれと同じように、「偉大な人」が世界と万物を創ったと信じ、落雷はこの「偉大な人」自身がすばやく天から天降って、

その焰の手でもって樹々を引き裂くのだと信じている。ヨーロッパの古代諸民族のカシ（樅——カシワと訳すのは誤説——筆者）の樹の尊崇と、彼らがこの樹と彼らの天空の神の間にたどる関係が、ヨーロッパの森林において落雷に見舞われる頻度から言つて、カシの樹が断然他を圧している事実によ來しているというのは、もっともらしい説である。とにかく事実そのものは、その当時ヨーロッパの大部分を覆いつくしていた大森林の中に居住するわれわれの未開的先祖たちの注意をひくに十分だったのである。彼らはその素朴な宗教的方法で、彼らが崇拜し、彼らが雷鳴のとどろきのうちにその畏るべき声を聞くところの偉大な空の神が、森林の他のどんな樹よりもカシを好み、しばしば雷霆のはためきとなって黒雲からその上に天降り、引き裂かれて黒焦げになった幹と萎れた葉に彼の存在と渡御の印を残すというふうに説明したことであろう。その後このような樹々は、雷霆をはためかす天空の神の目に見える座として、栄光の後光に取り巻かれることになるのである。ギリシア人とローマ人が未開民のあるものと同じように、大地を撃つ雷のはためきのゆえに天空の大神とカシの樹を同一視するようになったことは確実である。彼らはいつもこのような落雷の場所に囲いをめぐらし、これを聖所とみなした。中部ヨーロッパの大森林のケルト族およびゲルマン族の祖先たちが、落雷に焦がされたカシの樹を、同様な理由で同様に尊崇したと考えるのは決して行き過ぎではないのである。スイスやドイツなどの「雷箒」（樹の

枝の上に生える箒状で鳥の巢のような派生物のすべてを呼ぶ通俗の名称となっており、このような寄生植物は雷のつくつたものだと無知な人々は本心から信じこんでいるのである）崇拜の「真の理由は、このようなカシの樹がよく落雷に撃たれたばかりでなく、その枝の上に天上の火の目に見える放射をもっているという信仰であった。それで神秘的な儀礼をもつて寄生木を刈り取ることは、つまりは雷電のもつあらゆる呪力的属性の獲得にほかならなかつた。かりにこの説に謬りがないとすれば、寄生木はこれまで私が主張していたように、夏至の太陽の放射ではなくて、むしろ雷電の放射と見られていたと結論しなければならぬことが明らかになる」⁽⁶⁾。

要するに、原始民は落雷や雷火などの自然現象を世界と万物を創つた「偉大な神」自身が急速に天から天降つた形であると信じている。これはフレイザーの雷神説の中核であるといえる。というのは、「金枝」であるカシ（樅）でも「許神」である檜でも、いずれも火を含んでいるといわれる常緑樹だからである。この係わりの論述はあとに譲る。

納西族以外、哈尼族、傣族、基諾族、彝族、布朗族なども雷神を祭る風俗を持っている。これらの民族は、旧石器時代から残つてきた石斧・石杵などを雷神の象徴として祭っている。雷鳴と稲妻あるいは暴風雨があると、彼らは石器に香をたき、頭をつけて拝んで、雷神に怒りをおさめる（雷鳴・稲妻・暴風雨などが雷神の怒りの所為）よう祈る。基諾族は毎年六月雷神を

祭る儀式をおこなう。そのとき、家々は玄関の前に三本の竹竿を立て、竹竿の上に雷電の紋型を彫刻し、竹竿の下に豚と鶏の犠牲を供えている。人と畜が雷に打たれないよう、祈っている。哈尼族は特別に雷神を祭ることを重視する。毎年春の第一回雷鳴の後の三日目、「湯圓祭雷」（あんいり団子を供物として雷神を祭祀する儀礼）をおこなう。家々は庭に竹机を置いて、その上に二つ茶碗がある。一つの茶碗に塩を入れて「白湯圓」を代表し、もう一つの茶碗にきれいな水と三片の生姜を入れて「黒湯圓」を代表する。きれいな水と生姜は雨水と万物の発芽を象徴する。さらに、次の祝詞を歌う。

雷神よ

新雷の音がひびけり

われらは「白湯圓」を雷様にお捧げいたす

味わいくださいれ——今年の風雨順調、穀物豊作をお加護く

ださいれ

雷神よ

新雷の音がひびけり

われらは「黒湯圓」を雷様にお捧げいたす

味わいくださいれ

今年の人畜安康、雷に撃たれないようお加護くださいれ

（後略）

壮族の民謡は、「太陽さえも雷王様のもっている銅鼓から化身してきたのであり、雷王様は宇宙間の一切が主宰できる」と、

うたう。

雲南省の西双版纳曼景蘭寨（碧）では、傣族のある首領は、雷電に打たれて死んだ女性の陰部を切り取って、腕に掛けていたことがある。というのは、雷の威力の助けを借りて自身の精神と権力の強さを強めるのである。残酷なことであるが、これも雷に対する崇拜からである。

雷神を天神として祭祀していることは、口頭伝承の残っている納西族の古歌や土家族・侗族などの口頭の神話伝説から出ただけではなくて、文献にも記載している。宋代の周去非は『嶺外代答』に言う。

広右雷神を敬事し、之を天神と謂ふ。其の祭を祭天と曰ふ。（中略）其のこれを祭するや、六畜必ず具ふ。多くは百性に至る。祭は必ず三年なり。初年には薄く祭り、中年には稍し豊かにし、末年には盛んに祭る。祭毎に、則ち性を養ふこと三年、而る後に克く盛んに祭る。其の祭るや極めて謹しむ。里巷を同く雖も、亦た惧るる心有り。一たび或いは祭らずして、而して家中に偶々疾病官事有れば、則ち隣里親戚衆な之を憂れひ、以為らく天神実^{おもへ}にこの災^{わざはひ}ひを為せりと。

これは壮族の雷神を祭祀する壮大な模様である。時期は宋代であるが、納西族の祭天古歌という口頭伝承に残してきた民族学の資料と共に、納西族・壮族など少数民族の雷神信仰を生きと伝えている。

漢民族の民間伝承の神話異伝から、やはり原始の雷神崇拜の跡が窺える。浙江省の漢民族が「盤古が天地日月を開闢した後、十萬八千歳で死んだとき、身体は崑崙山になり、靈魂は雷公になった」と伝承している（「盤古王開天」即ち「天地開闢神話」⁽¹⁰⁾）というのは、その一例である。

雷神を天神として祭祀したことは、世界中にその例が存在している。これについては、エリアーデ氏の「天空神」についての詳しい考察を引かなければならない。

氏は次のように言う。

オーストラリア東南部（カミラロイ、ウイラジュリ、ニューアライ）の至上神バイアメ *Baiame* は天空の大きな川（天の川）のそばにすみ、そこで潔白な人々の魂を受け入れるのである。この神は水晶の玉座にすわっていて、太陽や月はかれの「息子」であり、また地上への使者である（実際には、フェゾ島のハラクウルブス族、サモイェド人におけるように、太陽と月は神の両眼なのである）。雷鳴はバイアメ神の声であり、また雨を降らせて大地全体を緑にし、肥沃にする。なぜならバイアメは「自己を創造した」のであり、またすべてを無から創造したのである。東岸（ミユリングなど）に住む他の部族も同じような神ダラムルン *Daramurun* を知っている。この秘教的な名は（バイアメの名にしてもそうだが）、加入儀礼を終えた者にしか伝えられない。女性や子供はこの神を「父」（*Papang*）や「主」（*Biamban*）としてしか知らない。その像はその後で

こわされて、念入りにばらまかれる。その昔、ダラムルンは一時期地上にいて、加入儀礼を創始した。それから再び天上に昇った。天からはその神の声（雷鳴）がきこえ、そこから神は雨を送る。天空神の性格は、オーストラリアの他の至上神にもみられる。その神々のほとんどは自分の意志を示すために雷鳴や落雷（たとえばブリャラナ *Pulyalana*）、風（バイアメ）、北極光（ムンガンガウア *Mungangaua*）、虹（ブンシル *Bunzir*、ヌルンデレ *Nurrundere*）などを用いる。

アンダマン諸島の、アジアでもっとも原始的な民族のひとつでは、ブルガ *Pulga* が至上神である。それは人間の形態において想像されるが、すまいは天空で、その声は雷鳴で、その息は風である。暴風はこの神の怒りのしるしである。つまり神はその掟に背く者に落雷をもって罰するからである。ブルガは全知であるが、人間の考えることは、昼間しかわからない（自然崇拜の特徴。全知＝全見）。ブルガは自分のために妻をつくり、子供を得た。かれの天空のすまいの近くに太陽（女性）と月（男性）とその子供たちの星がいる。ブルガが眠ると、旱魃になる。雨が降れば、それは神が地上に降りてきて、食物を探しているからである（植物の出現）。ブルガは世界を創造し、またトモ *Tomo* という名の最初の人間を創造した。そしてトモの死後、人類は前にもましていっそう創造主を忘れるようになった。ある日ブルガの怒りが爆発し、洪水が地球全体を呑み込み、人類に終止符を打った。ただし四人だけが逃げおおせた。

ブルガはかれらを憐れんだが、かれらは常に反抗的態度をみせた。神はかれらに最後に掟を想い出させてから、隠遁した。以後人間は神に二度と会うことはなくなった。

アフリカのチュイ族はニヤンクポン Nyankupon という語を用いる。これはかれらの至上神の名であるが、天空や雨を意味する。かれらはこういう。ニヤンクポン・ボム Nyankupon-bom (ニヤンクポンが打つ) すなわち「雷が鳴る」。またニヤンクポン・アバ Nyankuponaba という。これは、ニヤンクポンがやってきた、すなわち「雨が降る」の意である。カフエ谷のバントウ種族のバィイラ族は全能で、創造者で天にすむ至上神を信じ、レザ Laza と名付けている。しかし俗語でレザという語はやはり氣象現象を表わす。「レザが落ちる」といえば、雨が降るの意で、「レザが怒る」といえば「雷が鳴る」の意である、など。スーク族は至上神をトロールト Torout すなわち「天」と呼ぶが、またイラト Iat すなわち「雨」とも呼ぶ。いわゆる黒人においては、ニヤメ NjameNyame はやはり空を意味する (語根 Nyam [輝く] から派生)。

インディアンのポーニー族はティラワ・アティウス Tir-awatius (万物の父ティラワ) を、ありとあらゆる存在するものの創造者、生命の分配者と認めている。この神は人間の歩みを導くために星を創造した。稲妻はかれの視線であり、風はかれの息である。この神への礼拝はまだはっきりと天空神の色彩をおびたシンボルズムをとどめている。かれのすまいは、けっ

して変わることはない天空の、雲のはるか上にある。ティラワは高貴な宗教的神話的像となった。

マラッカ半島のセマング族も至上神カリ、またはカレイ、またはタ・ペドン Kari, Karei, Tapedu をもっている。この神について語るとき、セマング族ははっきりと、それが不死であるとはいわないが、永遠の昔から存在してきたことは肯定する。この神は、大地と人間を除くすべてのものを創造した。大地と人間とは、かれに従属する別の神プレー Ple の創造物なのである。カリは天にすみ、稲妻を投げて怒りをあらわす。そればかりか、その名前からして「雷」(暴風) を意味する。カリは全知である。この神は、いわゆる礼拝の対象ではない。ただ台風が荒れ狂うときにのみ、人々はこの神に贖罪の血の供物を捧げて、祈願するだけである。

インドのディアウス Dyas、古代イタリアのジュピター、ギリシアのゼウス、それにゲルマンの神ティル Tyr、イオ Tyrzio などはいずれも、この原初の天空神の進化した、歴史的な形態なのであり、この形態はそれぞれの名称にいたるまで、「光(日)」と「聖」という根源的な二項式をあらわしている、ということである。これらインド・アリア系の至上神の名は、静穏な晴天との有機的なつながりを表明している。しかしだからといって、多くの学者が考えているように、嵐、雷、雷鳴といった氣象の表現は、原初のディアウスの直観には一切欠如していた、とはいえないのである。もっとも原始的な天空神(た

たとえばバイアメ Baïame、ダラムルン Daramurun など)は氣象現象を支配していて、雷その主要な属性としていたのであった。

ケルト人はタラニス Taranis という、おそらくは暴風神であらう神を崇拜していた(ケルト語の語根 taran || 雷鳴から派生。アイルランド語 torann || 雷を参照)。バルト海沿岸のペルクーンナス Parkunas (|| 稲妻)や、原スラヴ人のペルン Perun (ポーランド語の Piorun || 稲妻を参照)もまた、とりわけ嵐の時に姿をあらわす至上の天空神である¹¹⁾。

エリアーデ氏の考察から、オーストリア・ケルト(ケルト族は現在アイルランドなどに在住)・アフリカ・インド・アメリカ(インディアン)・ヨーロッパなど幅広い範囲には雷神を天空の至上神として原始的に崇拜し、あるいは原始的に崇拜されている至上神は雷神と密接なかわりをもっている、ということがわかったのである。

納西族や壮族など中国の少数民族および漢民族の民間伝承の雷神信仰、フレイザーとエリアーデ両氏の「雷神説」を通して、中国の神話史と宗教史の中に神話典籍の歴史化と王権化によって埋没させられた一つの原始的な神話・宗教信仰を掘り出すことができる。即ち、前述した通り、甲骨文字の「神」の概念は「雷」崇拜の上に出てきたのであるという原始的な神話と原始的な宗教信仰である。

三、「蛇」の初め

なぜ原始民は雷神信仰を持っているのか。まずは次の神話を読んで論述を展開しようとおもう。

昔、共工は顓頊と帝を争い、怒りて不周の山に触る。天柱折れ、地維絶え、天は西北に傾く。故に日月星辰移る。地は東南に満たず、故に水潦塵埃帰す。

(淮南子・天文訓)より

「共工」とは、「天神、人面蛇身」(淮南子・天文訓)高誘注)。

神話の発生学からいうと、この「天地破壊型」神話は中国神話の発生根幹であるといえる。「共工」の「破壊」以後、「女媧は五色の石を煉りて、以て蒼天を補ひ、鼈の足を断ちて、以て四極を立て、黒龍を殺して、以て冀州を済ひ、芦灰を積んで、以て涇水を止む」(淮南子・覽冥訓)や「共工氏、乱を作すや、帝馨重黎をして之を誅せしむ、而も尽くさず」(史記・楚世家)などなど神話は発生したのである。

要するに、「共工」という「破壊神」は、中国神話の発生源らしい。それでは、「共工」はいったいどんな神であるのか。

中国神話学の碩学である聞一多・朱芳圃諸氏の優れた研究を要約すると、次の結論となる。

『楚辞・天問』はいう、「康回が激怒したとき、地はなぜ東南に傾いたのか」。王逸注、「康回は共工なり」。「天問」の「康

回」即ち『堯典』の「帝曰く、『嘘、言を静くすれども、庸違、恭なるに象て、天を滔る』と」中の「庸違」。「庸違」は「左伝・文公十八年」・『論衡・恢国篇』・『潜夫論・明暗篇』・『呉志・陸抗伝』などの中の「庸回」に従うべきである。実は「庸回」と「共工」が一人の神様である。⁽¹²⁾

なお、楚人の祖先は「呉回」といわれ、「呉雷」とも書いている。というのは、古音によって「回」と「雷」は通じている故である（呉雷〔楚公罇〕即ち呉回〔大戴礼記・帝系篇〕、『史記・楚世家』、『大荒西経』など）、方雷〔晋語・四〕即ち方回〔淮南子・俶真篇』など）、雷水〔穆天子伝』など）即ち回水〔天問』など）ともいわれる。こうすると、共工即ち雷神、と完全に認めることが出来る。

『淮南子・時則訓』の高誘注によると、「祝融の孫即ち老董の子は呉回なり、一名黎、高辛氏の火正と為し、号は祝融と為し、死にて火神と為す」。

森安太郎氏は「祝融即ち火の蛇電光は雲より発するものであるから、この意味で餽が祝融を祖として云姓（雲姓）であるとせられていることは、その祖祝融（火の蛇電光）の出づる所（雲）を明確に示しているもので、ここに祖名と姓との密接な関係を見るのである」と指摘していた。⁽¹³⁾

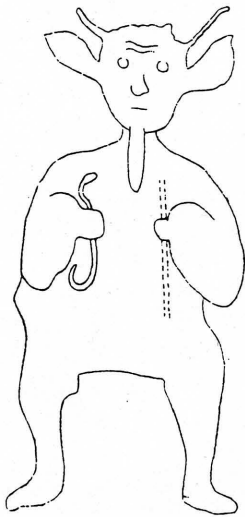
また、御手洗勝氏は、共工＝鯀、句龍＝禹、共工即ち句龍、「鯀・禹を父子とする伝説は由緒正しいもので、両者は夏氏族の祖先神であるだけでなく、起源的にも一神で、その実体は蛇

に外ならない（後略）と思う」⁽¹⁴⁾。

祝融即ち楚の祖先神、共工即ち夏の祖先神という説は別に検討の余地があるが、祝融と共工の「蛇」性は意味深い問題であると思う。

実は『山海経』に龍・蛇と係わっている神々は、東西南北中の五つ方位に遍在している。『列子・湯問』は、愚公が山を移ることを決定したが、「蛇を操る神は之を聞ひて、已まざることを惧るるや、之を帝に告ぐ」という。後魏の張湛は『大荒経』云、山海の神は皆蛇を執る」と注釈している。

考古発掘は『山海経』の記載と張湛の注釈の事実性を証明した。河南省信陽長台関の一・二号の戦国楚墓から、高さ一・五メートル、地に跪いて、前肢が禽獣の爪に類似し、舌を胸に長く伸ばして、頭の上に鹿の角を挿し、口の中に蛇をくわえている「怪獣」が二件出土された⁽¹⁵⁾。このような「怪獣」は湖南省湘



郷の戦国墓からも出土された⁽¹⁶⁾。近々数十年以来、重慶・成都・合川・新都・綿陽などの後漢晩期の墓室から、舌を長く伸ばし、右手が斧を持ち、左手が蛇を持つ「怪獸」が次々と出土された⁽¹⁷⁾。この種類の「怪獸」の具体像は、次の楽山・柿子湾の崖墓の石刻像に類似している⁽¹⁸⁾。

舌を長く伸ばし、右手が蛇を持っているのははっきり見えるが、左手の持っている棒状の物は長い柄の斧であろうと認定されている⁽¹⁹⁾。

つい近年、各地方から出土された銅器の上に「神人蛇を操る」という彫刻がしばしばある。戦国中期である江蘇省淮陰高莊戦国墓の例を挙げてみよう。それは、

- (1) 一神怪は両蛇を耳玉し、腕に羽毛がある(銅盤)。
- (2) 一神怪は両蛇を耳玉し、腕に羽毛があり、頭の上に柱状物があり、その柱状物の両側に各一蛇がある(銅盤)。
- (3) 一神怪は人面獸身、両蛇を耳玉している(匱(水あるいは酒を入れる容器))。
- (4) 一神怪は両蛇を耳玉し、腕に羽毛があり、両手が蛇を一匹ずつ操り、頭の上に柱状物があり、その柱状物の両側に各一蛇がある(銅盤)。
- (5) 一神怪は両蛇を耳玉し、頭の上に両小鳥があり、両手が蛇を一匹ずつ操っている(銅盤)。
- (6) 一神怪は人首魚身、両蛇を耳玉し、頭の上に両小鳥



があり、両手が獸の尾を一つずつ引っ張って、両足が蛇を一匹ずつ踏んでいる(銅器残片)⁽²⁰⁾。

まだいろいろあるが、次に基本的な画像をあげておこう。

宋の鴻儒である朱熹は、『山海經』は、「本凶画に因て之を述ぶ」(四庫全書總目・山海經条)と明快に指摘したが、前述した考古発掘の戦国と後漢の実例から、その図画の意味を一層確かめることができる。要するに、戦国及び後漢には蛇の崇拜が盛んに存在していたことを知ることができる。

日本の神話は、中国神話の「天地破壊型」と蛇崇拜に類似す

るものもある。

日本神話での最大の人気者はスサノオであるが、このスサノオは中国神話での「共工」のような「天地破壊的」「凶神」である。『古事記』によると、「三貴子」の一人としてのスサノオは、「命（汝命は、海原を知らせ」と事依さしき、という命）させし国を治らずて、八拳須心の前に至るまで、啼き伊佐知伎、其の泣く状は、青山は枯山の如く泣き枯らし、河海は悉くに泣き乾しき。是を以ちて悪しき神の音は、狭蠅如す皆満ち、萬の物の妖悉に発りき」。スサノオは「天に参上時、山川悉に動み、国土皆震りき」。高天原での「誓約」勝ちに乗じて、「天照大御神の菅田の阿を離なち、其の溝を埋め、亦其の大嘗を聞看す殿に糞麻理散らしき。（中略）登詔り直したまへども、猶其の悪しき態止まずて転かりき。天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひし時、其の服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剝ぎて墮し入るる時に、天の服織女見驚きて、峻に陰上を衝きて死にき。故是に天照大御神見畏みて、天の石屋戸を開きて刺許母理坐しき。爾に高天の原皆暗く、葦原中国悉に暗し。此に因りて常夜往きき。是に萬の神の音は、狭蠅那須満ち、萬の妖悉に発りき」。

スサノオの名義と性格についての多くの先学の論述を一々挙げることは無理であるが、大きっぱに要約してみよう。この名義としては、古来勇み進む意のススム、荒れ狂う意ササブから出ていて、「勇み進む男」もしくは「荒れ狂う男」という意味

であるとすると、地名（出雲及び紀伊にある）のスサから出ており、「須佐の男子」を意味するという説とに分かれる。スサノオに類似した性格を持っており、しばしば比較神話の材料に出される北欧のオーディンまたはウォーダンも、その名義は「野生の」もしくは「狂暴な」を意味する語であるし、同様なインドの暴風雨ルドラ Rudra の名も、「吠えるもの」ないし「うなるもの」を意味する語から出ている（カミナリの「鳴る」と関連があるらしい）。

この神の性格は、高木敏雄氏などの暴風雨神説、松前健氏などの暴風雨神兼外来神説、松本信広氏の出雲神話におけるの雷神・水神説²⁴、肥後和男氏の原始的蛇体の山神説²⁵、松村武雄氏の農耕に關係の深い雨水神説²⁶、などから知ることができる。

蛇崇拜というと、三輪山系の神話の発生地である三輪山は、「蛇神伝承の本拠地」といわれている。三輪山においての日本の「もっとも古い祭祀形式をいまに残し伝えている」大神神社（主たる御祭神は大物主大神である）は、「山そのものを御神体として」本殿をもたなかった。この神社のもう一つの特徴は、「拜殿前、齋庭の右側に、玉垣でかこまれた二股の老杉が、巳の神杉とよばれている。（中略）この杉は室町時代の絵図にもはっきり『星降りの杉』と記入されている。（中略）この『星降りの杉』の太木の根方にポッコリ穴があいており、いつの頃からか棲みついた蛇が、御祭神の化身とまで畏敬されるようになったものである。』²⁷『日本書紀』崇神天皇十年九月条によると、

「倭迹迹姫命、夫（大物主神）に語りて曰く、「君、常に昼は見えたまはねば、分明に其の尊顔を視たてまつること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に仰ぎて美麗しき威儀を覲たてまつらむと欲ふ」といふ。大神対へて曰はく、「言理灼然なり。吾、明旦に汝が櫛笥に入りて居む。願はくは吾が形にな驚きそ」とのたまふ。爰に倭迹迹姫命、心の裏に密に異しび、明くるを待ちて櫛笥を見れば、遂に美麗しき小蛇有り。其の長さ大さ衣の紐の如し。則ち驚きて叫啼ぶ。時に大神、恥ぢて忽に人の形に化り、其の妻に謂りて曰はく、「汝、忍びずて吾に差せつ。吾、還りて汝に差せむ」とのたまふ。仍りて大虚を踐みて御諸山に登ります（後略）。なお、同紀の雄略天皇七年七月条に「天皇小千部連螺羸に詔して曰はく、『朕、三諸岳の神の形を見むと欲ふ。（或いは云はく、此の山の神をば大物主神と為ふといふ。或いは云はく、菟田の墨坂神なりといふ。）汝、膂力人に過ぎたり。自ら行ききて捉て来』とのたまふ。螺羸、答へて曰さく、『試に往りて捉へむ』とまうす。乃ち三諸岳に登り、大蛇を捉取へて、天皇に示せ奉る。天皇、齋戒したまはず。其の雷虺虺きて、目精赫赫く。天皇、畏みたまひて、目を蔽ひて見たまはずして、殿中に却入れたまひぬ。岳に放たしめたまふ。仍りて改めて名を賜ひて雷とす」とある。

三輪山系の神話は多くの学者に日本神話の古里といわれている一方、日本神話での蛇崇拜は、発掘された縄文土器にみえる蛇の造形に確認することができる。例えば、山梨県塩山市重郎

原遺跡出土の勝坂第Ⅲ様式の深鉢（縄文中期）の文様にみられる。

縄文期の蛇崇拜は、『常陸国風土記』にも残されている。それを要約すれば、次のとおりである。

昔、ヌカビコとヌカビメの兄妹あり、妹の室をあるしらぬ男が夜たび通つてきて、妹は娠んで子を生んだ。子は小さな蛇で、急に成長して大蛇となった。初めは小さな杯に入れたが、大きくなりすぎたので、瓮にかえた。やがて室一杯の大きさとなった。そこで母のヌカビメが「お前は神の子だから、とてもわれらが育てられない。どうかでて行ってくれ」と、頼んだ。子は承知し、伴にちいさい児をつれて行きたいと言った。それを断ると、蛇は怒り、父親を殺そうとした。母のヌカビメが驚いて瓮を取つて投げつけたが、蛇はそれに当たって、空に飛べなくなった。そこでこの地の峯にとどまって、神社の神になった。その神社には、今でも、その平瓮とカメがある。

この伝承は完全な蛇崇拜としては認められない。なぜ蛇が空に飛んでいこうか。

柳田国男氏の『雷神信仰の変遷』における説によれば、「即ち曾て我々の天つ神は、紫電金線の光を以て降り臨み、龍蛇の形を以て此世に留まりたまふものと、考へられて居た時代があつたのである⁽²⁹⁾」。中国もそうである。広西・甘肅などの口承神話は、雷神を電蛇と称しているが、『山海経・海内東経』には「雷澤中に雷神有り。龍身にして人頭」という記載もある。つ

まり、蛇（龍）崇拜は雷神信仰と関連している。

縄文人の蛇崇拜について、大きな研究業績を挙げた、「蛇崇拜の専門家」といえる吉野裕子氏は、つぎのようにいう。

おそらくそれはズバリいって、次の二点ではなかったらうか。

(1) まず蛇の形態が何よりも男根を連想させること。

(2) 毒蛇・蝮などの強烈な生命力と、その毒で敵を一撃の下に伏すつよさ。

(中略) 要するに縄文時代人の蛇への反応は第一にその形態に対して、第二にその毒の強さ、生命力の旺盛さに対してであって、それらは相乗効果をもって、蛇を祖先神にまで崇めて行ったのである。

縄文につぐ弥生時代は、紀元前三世紀から紀元後二世紀といわれ、稲作をひろくこの列島にもたらした弥生人は急速に縄文人と混血し、同和したと大体考えられている。

(中略) 稲作をもって日本に渡来した弥生人の故郷は、中国の江南地方、東南アジア、その他と推測されているが、彼らには彼らなりの各自別様の蛇信仰があったに相違ない。(中略) 要するに弥生の頃の蛇信仰には縄文人のそれを引き続き、それと混合したものの、彼ら独自のもの、鼠の天敵として田の神に移行する蛇信仰等があり、それら各種の蛇信仰が混在し、複雑な様相を示して展開してゆくことになる。

そうしてこれらの蛇信仰には、それに付随して、縄文時代にひきつづき、「蛇巫」の存在が考えられるが、これら男女の蛇巫は蛇を飼い、蛇を祀って、祖霊としての蛇の託宣をきくことをその天職としたのではなからうか。⁽³¹⁾

ここには仮にスサノオという「暴風雨神」・「暴風雨神兼外来神」・「雷雨神・水神」・「山神」・「農耕に關係の深い雨水神」を「雷神」と考えたとしたら、日本神話での雷神と縄文人・弥生人の崇拜していた蛇とは、一体どのような関連があるのか。

倉野憲司氏は「上代において雷神と蛇神とは同一視されていたのである」⁽³²⁾という。

次田真幸氏は「(前略) 雷と蛇とは、天と地にあつてもともに水をつかさどり、稲の成長と豊熟とをしいする神として、ひろく農民の尊崇の対象となった。すなわち水田に水を供給する神という意味で雷と蛇とは結合し、一体の神として信仰されたのである。なお雷と蛇とが、稲の成長期にあたる炎暑のころに、時期を同じうして現れるということや、稲妻のひらめく形が蛇のうねり跳るさまを連想させるという心理的な現象も、雷と蛇とを結びつける動機となったであろうと考えられる。このような原始的な信仰が土台となって、神話の世界では雷神が蛇体の神として姿をあらわすことになったのであると思う。そして雷神は地上に降るとき、蛇神として現れるという信仰は、神話や説話の上では、雷神の正体が蛇体である、という形で表現せられる。要するに雷神および蛇神の信仰や祭儀は、もともと農耕

生活に従事した民衆の間に発達し、しだいに全国的に広まったのであって、今日もなお各地の農村に、古代の三輪山説話の系統をひくとと思われる説話が、昔話として根強く語り伝えられているのも、当然のことといわねばならない⁽³³⁾、という。

吉野裕子氏は、前文に挙げた『日本書紀』雄略天皇七年七月条の「小子部連螺贏」神話を例として、次のように論述した。

「この場面では、蛇と雷とはまさに同一物である。おそらく古代においては、イカツチとは蛇、それも神蛇の名称の一つだったと思われるが、いつからかそれが『雷』のことになったとわたしは思う⁽³⁴⁾」。

この諸説を検討してみると、倉野憲司氏の論を「上代での雷神と蛇神との一体説」、次田真幸氏の論を「農耕文明での雷神の正体が蛇体である説」、吉野裕子氏の論を「蛇の本説」即ちイカツチ（雷）という概念は蛇の崇拜からなってきたのであるとする説、と定義することができる。

倉野氏の「一体説」について、納得することができるが、理由不明という疑問もある。

次田氏の「稻妻のひらめく形が蛇のうねり跳るさまを連想させる」という論は、雷神と蛇崇拜との係わりの的を射ているのであるが、「農耕文明での雷神の正体が蛇体である説」が農耕文明前の原始社会から始まった雷神信仰を農耕文明だけの信仰としているのは不適當であると、私は思う。

さて、吉野氏の「蛇の本説」はどうであらうか。

雷神は天空神である。これは世界中の雷神神話の共通点であるといえるであろうが、蛇神の天神としての性格は雷神と一体になってこそ、あるいは農耕文明に入って雷雨神と一体になってこそ、はつきりと現れたのである。要するに、天神としての蛇神は、雷神の性格をもってこそ、天神になったのである。

前文に言及した『常陸国風土記』の「ヌカビコとヌカビメ」伝承についての「なぜ蛇が空に飛んでいこうか」という疑問は、ここで釈明できる。即ち、この蛇崇拜の深層は雷神崇拜である。こうなれば、吉野氏の「蛇の本説」は成立しがたくなる。一言でいえば、中国神話の「天地破壊大神」である「共工」も、これに類似する日本神話の「凶神」・「祓の対象としての罪穢の化身とされるスサノオも、まずはみな天神の性格を持っているし、雷神の特徴（雷鳴、洪水、旱魃など）をも持っている。逆にいうと、天神と雷神としてのみ、「共工」と「スサノオ」とは天地破壊の「凶神」・「禍事の神」の能力を持つことができるのである。前述したことからわかるように、「共工」と「スサノオ」とも蛇体の神性を持っているが、蛇の神としては独立な性格を持っていないらしいのである。例えば、蛇の信仰の本拠地である三輪山の「蛇神」は、「神杉」と「星降りの杉」との信仰があるが、純粹な蛇神信仰のみではないと思う。この蛇神信仰の「非独立性」は世界的な神話現象らしいのである⁽³⁵⁾。もちろんこれは神話形成の重層性に規定されたのであるが、蛇信仰の「非独立性」が何を隠しているのかを究明して、その深層の

原始性を発見することができるかもしれない。

四、雷神の本源

中国の納西族・壮族などの少数民族が雷神を最高天神として祭祀していたの⁽³⁶⁾に対して、『山海経』・『莊子』・『淮南子』・『礼記』などの先秦及び両漢の主な神話典籍の中、雷神が世界と万物を創った最高の天神であるという記載は、一切みえない。なぜならば、中国歴史の進化と関連している故である。

すでに（二章 一〇六頁）言及したが、中国は夏に入ってから王朝文明の社会になった。夏と次の殷（商）代の宗教の特徴は、王・王権と神・巫との三位一体である。「商湯乞雨」の神話はこの「三位一体」の関係を具体的に現している。

「商湯乞雨」の神話は『墨子』・『帝王世紀』・『淮南子』などにあるが、『呂氏春秋・順民』の例を挙げてみよう。

昔者湯、夏を克つて天下を正す、天大に旱して、五年収めず。湯乃ち身を以て桑林に禱つて曰く、「余一人罪有らば、万夫に及ぶこと無かれ。万夫罪有らば、余一人に在り。一人の不敏を以て上帝鬼神をして民の命を傷はしむること無かれ」と。是に於て、其の髪を翦り、其の手を磨ぎ、身を以て犠牲と為し、用つて福を上帝に祈る。民乃ち甚だ悦び、雨乃ち大に至れり。

注意すべきなのは、「上帝」の言葉の出現である。勿論上帝は信仰されている最高の神である。中国の上帝信仰は夏代に始

まったと一般に認められる。しかしながら、この上帝は納西族や壮族などが最高の神として祭祀している雷神ではなく、抽象化された至高無上の権利と万能的な知恵を持っている人格神である⁽³⁷⁾。

商湯は国王として同時に最高の巫であった。彼は上帝の人間での代理人として、上帝と意志を通じ合う資格を持っている。そして、この資格は彼しか持っていない。

納西族や壮族などの自然崇拜である雷神信仰と相違して、夏・商代の上帝信仰は、上帝崇拜と祖先崇拜との融合した王朝社会の宗教信仰に属している。つまり、この上帝信仰は歴史化・王朝化されたものである。だから、夏王朝以来の神話も「人神混雑」、王朝化・歴史化したもの、「共工」の破壊型神話も例外ではない。にもかかわらず、「共工……怒りて不周の山に触る」ことによって天地崩壊、洪水氾濫および火山爆発などの壊滅的な災をもたらした「怒」の様相は、ちょうど納西族や壮族などの自然崇拜である雷神の「威嚴」・「神威」と照合しているのである。なお、「共工」と「スサノオ」とも納西族の天神である雷神の「鳴り」＝「怒」という特徴を持っている。

この点からいうと、「凶神」・「罪穢の化身」らしい「スサノオ」は「共工」と納西族や壮族などの雷神とはまったく同族のようなのであろうと思う。

納西族の『祭天古歌』には、雷神は「火炎を放つ衣服をはおる神なり／輝かしき火の靴を履ける神なり」、「昔、われらの男

兎山頂へ柴を刈りに行きしとき／無知の故に誤りて雷神の樹を伐りしことなし／昔、われらの女児谷に水をくみにいきしとき／愚かさの故に誤りて雷神の水をすくいしことなし／われらは雷神の聖なる山の磐石に敢えて触れしことなし」という文句がある。これは火神・山神・水神の神性を持っている雷神の性格ではないであろうか。だからこそ、聖人孔子の『説卦伝』はいう、「帝は震に出でて……万物は震に出ず」（許慎の『説文』曰く、「震は霹靂の物なり。（霹靂は雷文震なり）」。「震」即ち雷）。要するに、雷（火・山・水）は天地形成と万物生成及び神・帝生誕の本源であると、孔子は考えている。

三輪山の壮大な「繞道祭」（御神火まつり）、御田植祭におこなう水口まつり（水神崇拜か）、鎮花祭（疫神信仰か）などは、みな雷神の神性と関連していると思う。また、三輪山の「巳の神杉」信仰は、納西族の『祭天古歌』中の「雷神の樹」（フレイザーの「金枝説」）の信仰に類似している。このように考えれば、三輪山系の神話及び蛇神崇拜の深層には原始的雷神信仰がながれていた、と考えることができる。

宗教起源説の一つである「恐怖説」から考えてみると、「共工」・「スサノオ」の「天地破壊型」神話（中国と日本との神話の発生根幹）の原動力は原始民の雷神への「畏怖感」である。つまり、これらの神話は雷神への畏怖の気持ちから発生したものである（即ち、王充の『論衡・雷虚篇』が言う「天怒」）。

フランス南部のラスコー洞窟に発見された右手が牛の角を握

っている婦人石彫像は、約二万年前のものであり、狩猟と係わっている宗教儀式を司っていると、多くの学者に認められているが、原始宗教はこれよりもっとふるいと断言できる。そのもつとふるい原始年代に、原始民の生存を脅かすのは毒蛇猛獣や風雷雨電など自然災害以外の何物でもない。毒蛇猛獣に対しては戦うことができるが、暴風雨と雷火電撃という自然災害に面しては原始民は死を待つ以外にできない。まさに納西族の『祭天古歌』（「雷電篇」・フレイザーやエリアーデの「雷神説」などは、「雷火電光・暴風雨・大洪水などの恐ろしい自然現象や自然災害は天神（雷神）の怒りのしるし」というテーマを共有しているように、世界中の原始民は普遍的に雷（雷神）への畏怖感を持っている。言い換えれば、原始民は雷への畏怖によって雷を神として崇拜してきたのである。

これは甲骨文字の「神」の概念が「雷」への崇拜の上に出てきた内因ではないであろうか。

日本神話の雷神はイカヅチと訓まれる。その本来の意味について、いろいろな解釈があるが、雷の「怒り」は基本的なものである。例えば、（１）雷は陽火の分散である。雷は怒る神という義で、また怒撃の意である（龍雷伝）。（２）雷とは怒って土に落ちるといふ義である（日本釈名）。（３）雷は畏まるべき神という義で、上古は諸神に用いたものである（東雅）。（４）雷はイカヅチである。イカは、蔽の意で、ツは助辞、チは知るといふ程の美称である（古事記伝）。かみなり（雷）は神鳴の

義(俚言集覽・言元梯・大言海)であるという解釈も、雷神の驚天動地の仕業を現した。

この雷神の恐ろしさは世界的なものである。

古代メキシコの第三世界は雨の神であり火の神でもあったトラロックの保護のもとにおかれていた。トラロックは破壊的な神で稲妻と落雷は破壊の前ぶれと考えられていた。⁽³⁹⁾

この雷神への恐怖感は、近代文明にはいっても依然として残っている。近代ヨーロッパの宗教絵画の中に、雷神への恐怖のテーマがよく見える。落雷——田舎の礼拝堂の壁には、願いがかなったときに献上される額や品物などの奉納物が所せましと飾られていることが多い。アローシュ、ノートルダム・ド・シヤトーの『落雷の事故』(一八二〇年の絵馬)は、聖母マリアが家、家畜、収穫物を落雷から守ってくれたことに感謝するためのものである。稲妻が光った空の方向を見る勇氣のある者には、天国の片隅と、聖母マリアがみえるという、ノルマンディ地方の民間信仰が描かれている。同氏の『漁師の小屋に落ちた雷』は、船員たちが嵐の時に港役所の掘っ立て小屋に避難すると、落雷に遇って火事になってしまった。その厄払いのための絵馬である。⁽⁴⁰⁾この絵馬の背景は、当時礼拝堂に納められた奉納物の大部分は落雷、嵐、洪水を逃れることのできた人たちが贈られたものである。こういった自然現象によって突然日常生活から切り離されることを、当時の人々がどれほど恐れていたかがわかるであろう。⁽⁴¹⁾

「恐怖感」に対して、「功利感」は宗教起源のもう一つの内因であるといわれる。フレイザーの指摘した通り、原始民が雷を神聖視しているのは雷火の故でもある。言い換えれば、原始民の眼からみると、雷は神聖な火を持ってきたのである。中国の壮族神話『布洛陀』⁽⁴²⁾と佤族神話『吾ら人間は如何にいままで生きてきたのか』⁽⁴³⁾はともに、雷の火を持ってきたテーマである。前者はいう。火は雷公が稲妻で大きな榕樹を撃って発生したのである。

後者はいう。雷神が人間に藤と木による摩擦出火の方法を教えた。そこで、人間が火を得て調理した物を食べるようになったのである。

世界の考古発見から、人類が最初に自然火を使って、あとに人工出火を発明した、とわかったのである。中国では今から約三十〜二十三万年前の北京周口店の洞窟遺跡で原始人が火を使ったことが発見された。⁽⁴⁴⁾とすると、数十万年前の原始人は、すでに火を使い始めていたのである。

日本では、縄文の「火炎土器」⁽⁴⁵⁾から原始人の火崇拜もわかったのである。

この宗教信仰の功利性について、『国語・魯語』は言う、「(前略)之に加ふるに社稷山川を以てするは、皆民に功烈有る者なればなり。前哲令徳の人に及ぶは、明質と為す所以なり。天の三辰に及ぶは、民の瞻仰する所以なり。地の五行に及ぶは、生殖する所以なり。九州名山川澤に及ぶは、財用を出す所以なり。」

り。是に非ずんば、祀典に在らず（後略）⁽⁴⁶⁾。これは春秋年代の魯国のことである。春秋年代の宗教信仰は原始宗教信仰とかなり違っているが、功利性そのものは原始民の宗教観と違っていない。つまり、原始民が雷神を最高の天神として祭祀しているのは、一方では「天（神）怒」させないためであるが、また一方、雷神は火などの生活を保証するものを賜ってきたのである。納西族の古歌が歌っているように、「われら一家は子々孫々栄え／われらは富裕と幸福にならむ／われらは益寿延年を得む／これらはみな雷神の庇護のおかげなり」。

ここで甲骨文字の「申」に戻ってみよう。古文字学者唐蘭氏は、「真正の初文字は象形文字である。象形文字から単独の象意字が分化できるし、複雑な象意字にもなれる。また形符あるいは声符を加えて形声文字になれる。すべての文字は象形文字という根本を持っていないと、成立できない。（中略）簡単に言えば、文字は図画と言語の合わせからなってきたのである。一部分の象形文字は二万五千年前の旧石器時代にすでに発生していたといえる。というのは、洞窟に棲んでいる原始芸術家は少数の言語しか使用できないわけである。彼らは一匹の象を描いて、それを象と呼んだ。そこで、この象の図画は文字になったのである」⁽⁴⁷⁾。

現在に残っている「申」（神）という甲骨文字は殷（商）時代のものであり、三千年ぐらいの歴史しか持っていない。数千年前にすでにあった一部分の象形文字にはこの文字があるかど

うか、断定できないが、少なくとも数万年前の神及び宗教の起源を尋ねるのに糸口は見つけられた⁽⁴⁸⁾。即ち、「𩇛」（神）は雷電であり、雷電は「𩇛」（神）である。そして、雷神は普通の神ではなく、「世界と万物を創った」天神、原始民に最高の天神（農耕・王朝文明時代の上帝に相当している）として祭祀されている。宗教史から言うと、この雷神信仰はトーテム崇拜や靈魂崇拜などより先に出現した自然崇拜に属していると考えられる。地域から言うと、この雷神信仰はある地域に限られず、世界中の原始民が自発に共同に持っているものである。だからこそ、中国・日本・ギリシア・インドなどの開闢大神や人格化された祖先神などは、みな雷神と関連している（例えば中国の盤古・黄帝、日本のイザナミ・スサノオ⁽⁴⁹⁾など）のである。この問題については、雷神の転化として別論で考察しようと思う。

結論

雷神の文字学の考察、納西族や壮族などの口頭の神話と近古（宋代）および現在に残っている雷神を祭祀する民俗の考察により、原始民の神という観念は、雷神を「世界と万物を創った」最高の天神として祭祀することと共に出現した、と考えることができる。つまり、雷神の起源は神即ち宗教の起源と共に発生したのである。原始民の雷神信仰は自然崇拜に属するのであるが、その後に出現してきたトーテム崇拜や祖先崇拜などは、雷神崇拜と切っても切れないつながりを持っている。

注

- (1) 柳田国男氏『雷神信仰の変遷』、中山太郎氏『雷神研究』、聞一多氏『伏羲考』、朱芳圃氏『共工・句龍篇』など。
- (2)・(3) 郭沫若氏『卜辞通纂考釈』、孫海波氏『甲骨文録』、高明氏『古文字類編』など参照。
- (4) 東巴文とは、納西族が古代に使っていた絵画文字およびそこから生まれてきた象形文字である。絵画文字の形成年代は大體十二世紀後半から十三世紀前半の間であるといわれる。
- (5) 『祭天古歌』、中国民間文芸出版社、一九八八年、第一〇二～一〇七頁、拙訳。
- (6) フレイザー著、永橋卓介訳『金枝』(五)、岩波書店、一九五一年、第一三二～一三五頁、参照。
- (7) 揚学政氏『原始宗教論』、雲南人民出版社、一九九一年、参照。
- (8) 『特康射太陽』、『壮族民間歌謡資料』(内部刊行本)による。
- (9) 『雲南少数民族社会歴史調査資料』、雲南省歴史研究所、一九六四年、参照。
- (10) 『民間文学』、一九八六年第十一期。
- (11) エリアーデ氏『太陽と天空神』、せりか書房、一九八六年、参照。
- (12) 『聞一多全集』(二)中の『伏羲考』、三聯書店、一九八二年。朱芳圃氏『中国古代神話与史実』中の『共工・句龍篇』、中州書画社、一九八二年、参照。
- (13) 森安太郎氏『黄帝伝説』、京都女子大学人文学会刊、一九七〇年、第一一頁。
- (14) 御手洗勝氏『古代中国の神々』、創文社、一九八四年、第一三五頁。
- (15) 『信陽楚墓』、文物出版社、一九八六年、参照。
- (16) 『文物』、一九七九年第七期、参照。
- (17) 『考古』、一九八八年第三期など、参照。
- (18) 『四川漢代画像選集』、群聯出版社、一九五五年、参照。
- (19) 吳榮曾氏『戦国漢代『操蛇神怪』及其有関神話迷信的變異』、『文物』一九八九年第十期。
- (20) 『考古』、一九六三年第三期、『文物』一九八五年第一期、『考古学報』一九八八年第二期など、参照。
- (21) 松前健氏『日本神話の形成』、塙書房、一九九一年、第一〇九、一一〇頁、参照。
- (22) 高木敏雄氏『比較神話学』、『日本神話伝説の研究』、参照。
- (23) 松前健氏『日本神話の形成』、参照。
- (24) 松本信広氏『日本神話の研究』、参照。
- (25) 肥後和男氏『日本神話研究』、参照。
- (26) 松村武雄氏『日本神話の研究』第二卷、参照。
- (27) 中山和敬氏『大神神社』、学生社、一九七一年、第四一、一五六頁。
- (28) 『詩経・邶風・終風』における「虺虺其雷」(雷の始発の音)と『雄略紀』の「其雷虺虺」とは、みな雷の音を表現する文であると、私は思う。

(29) 『定本・柳田国男集』第九卷、筑摩書房、一九六九年、第六五頁。

(30) 『壮族民間故事選・布伯的故事』、上海文芸出版社、一九八四年、霍想有編『伏羲文化』、中国社会科学出版社、一九九四年、参照。

(31) 吉野裕子氏『日本の蛇信仰』、法政大学出版社、一九七九年、第二四、二五頁。

(32) 『日本古典文学大系』1・『古事記・祝詞』補注一四、岩波書店、一九五八年、第三四五頁。

(33) 次田真幸氏『日本神話にあらわれた雷神と蛇神の研究』、『お茶の水女子大学人文科学紀要』、十一巻第七四頁。

(34) 吉野裕子氏『日本人の死生観——蛇信仰の視座から——』、講談社、一九八二年、第一三二頁。

(35) クレタ島、イラクリオン博物館の大地母神像は、体に蛇をぐるぐる巻きにしており、帽子の上には蛇が鎌首をもたげている。また、娘の大地母神像は、両手に毒蛇を持っている。

(36) なぜ納西族や壮族などの少数民族は、雷神を最高の天神と祭祀する自然信仰を持っているのか。

納西族は今中国の雲南・四川とチベットに散らばっていて、人口は二十五万あまり、主な住居区は雲南省の麗江地域であるが、もともとの古納西族は古羌族の子孫民族である。殷の甲骨文字に「羌方」がある。この「羌方」は商代の西部の強国であり、常に商民族に討伐されていた(ある学者は、甲骨文字の「羌方」が商民族に捕まえられた西部の各民族の人々である、と認めている)。商末、羌人は周武王の殷紂王への討伐戦闘に

参加したことがある。

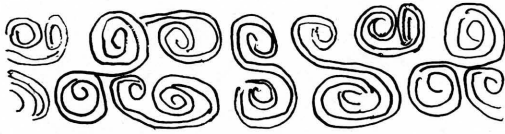
壮族といえば、周武王が商を討伐するとき、牧野で合流宣誓する八民族には「庸、蜀、羌、鬻、微、盧、彭、濮」(尚書・牧誓)がある。この濮即ち壮族である。周人が商に代わって中国の王朝統治権を取得したあと、濮人に封地封爵をしなかっただけではなく、暦王の年代、濮人の都邑を討伐した(宗周鐘銘文)はいう、「南国の反子は敢て吾が土に陥し、王自ら崇伐たんとしてそれ至り、濮岳都に伐たる」。反子即ち濮子、崇伐即ち敦伐——伐つ)。つまり、濮(壮)族は周王朝に度外視されている。

大ざっぱに言うと、古納西族と古壮族は商と周の「異民族」および「非王朝社会」として、商と周の歴史的神話と王権化的宗教信仰に相違する神話と宗教信仰を保持している。さらに、納西や壮族などの少数民族は今でも原始的祭祀儀礼を保有している。とにかく納西族の「東巴」象形文字の「祭天古歌」は、本民族および中国の神話と原始宗教を研究する貴重な文献である。

(37) 郭沫若氏はいう、卜辞中の「帝」が即ち「高祖夔」、殷(商)の「帝」崇拜が王室祖先の崇拜である(『卜辞通纂』、東京、一九三三年初版、参照)。胡厚宣氏も同じ論を持っている(『殷虚卜辞における上帝と天帝』、『歴史研究』一九五九年第九期、参照)。

(38) 中山和敬氏『大神神社』、学生社、参照。

(39)・(41) ジャーン・ピエール・グェルデ氏『天文不思議集』、創元社、一九九五年、第九八頁。



縄文中期深鉢 (福島県二本松市塩沢上原遺跡出土、福島県教育委員会) より (筆者模写)

(40) イエールのノートルダム・ド・コンソラシオンの奉納物。

(42) 『広西民間文学叢刊』第五期、参照。

(43) 『雲南各民族民間故事選』、人民文学出版社、一九六二年、参照。



(44) 『中国考古』、上海古籍出版社、一九九二年、参照。

(45) 縄文中期、立体的な火炎状の装飾をほどこした土器。新潟県など出土。

(46) 祭神の功利性について、『礼記・祭法』もいう。「夫れ聖王の祭祀を制するや、法、民に施すものは、則ち之を祀る。死を以て事を勤むるものは則ち之を祀る、勞を以て国を定むるもの

は則ち之を祀る、能く大畜を御ぐものは則ち之を祀る、能く大患を捍ぐものは則ち之を祀る。(略) 及び夫の日月星辰は、民の瞻仰する所なり、山林川谷丘陵は民の財用を取る所なり、此の族(類)に非ざれば祀典に在らず」

(47) 唐蘭氏『中国文字学』、上海古籍出版社、一九七九年、第九〇頁。

(48) 上図の縄文土器の様子は、「」(雷)、「」(神)の甲骨文字にそっくりであるが、雷神崇拜と関連してあるであろうか。これについての詳論は別論に展開することにしよう。

(49) アイヌの神話では、次の「父は雷神」というものもある。天の神々が大勢集まって天国の門の処に立って遙かに下界の人間の郷を見ていると、二つ並んで立っている家の中に、美しい少女がいるのが見えた。少女たちは神々の見下ろしているのも知らずにいたが、神々は美しい女だといって褒めている。殊に雷神が一等前へ出て、にこにこして見とれていた。それを他の神達がいらずらをして後ろから突いたので、雷神は天から落ちて人間の郷のその少女たちの上へ墜落した。それがためその家はすっかり焼けてしまった。ただあかだも(チキサニ)の木(火の木といわれる)とおひょうだも(アトニ)の木が焼けて立っていた。即ちその少女達はチキサニ媛とアトニ媛とだったのである。二人はこの時から妊娠をして各々男児を産む。チキサニの産んだのは、オйнаカムイのアイヌラックル(火神、戦神、正義神などの性格を持っている文化神)で、アトニ媛から生まれたのはユカラカムイのポイヤウンベである。それだから二人は腹違いの兄弟なのである。またそれだからオйнаカム

イの顔は赤くて（チキサニは樹肉赤色）、ユカラカムイは真白（アトニは木肌の白い木）だと。金田一京助氏『アイヌの神典』、八洲書房、一九四三年、参照。

付記

本誌第十三集（平成八年三月）に掲載された拙稿「日・中両民族の雷神思想の源流」（その二）は、因果観の雷神信仰起源に着眼して、日本と中国の雷神思想の源流を検討したが、本稿はさらに神話史と宗教史の起源から、雷神の至上神としての神格を探ってみる。何れも「雷神の研究——中・日の文化交流をめぐって——」というテーマの基礎研究である。

なお、本稿と前稿に相关的内容は、「第七八回 日文研フォーラム」で発表したことがある。当時、コメントーターとしての、本センターの井波律子先生から貴重な助言を賜わった。また本稿と前稿の作成中、同センターの鈴木貞美先生から丁寧なご指導をいただいた。ここで、両先生に対して謝意を表したい。